

十二章

地上界での霊の介入

靈が吾々の思想をのぞく

〔四五六〕 靈は吾々のしていることを何でも見ているのですか。

「そうしたいと思えば、それは出来る。靈が貴方の傍にいつもくっついていればだが。しかし、実際には靈は自分が注意を向けたものだけを見ている。自分に興味のないものには注意を向けないのである」

〔四五七〕 私共のいちばん隠している気持を靈は見抜けますか。

「諸君が隠したがっていることを、靈が見抜いてしまうことはよくある。思想でも行為でも、靈から隠すことは不可能である」

——では、人間同士でも、その人が生きてる間に隠せても、死んでしまえば隠せぬという事ですか。

「そのとおり。どんなに人の目から隠したいと思っても、貴方の周りには沢山の靈魂がいて、貴方を見ている」

〔四五八〕 私共の周りにいて私共を見ている靈は、私共のことを何と思っていますか。

「それは靈の質によって違う。つまらぬ靈どもは、諸君らにささいな悩みを引き起こしては楽しみ、焦^{いら}だてては笑いものになっている。真面目な靈は、諸君等の欠陥をあらわれんで、それを直してやろうと助力を与える」

吾々の思想や行為に靈が及ぼす影響

〔四五九〕 靈は私共の思想や行為に影響を与えますか。

「その影響は諸君が想像するより大きい。諸君の思想も行為も、これを動かしているのは靈達であるから」

〔四六〇〕 私共は、自分自身から生まれる思想と、他より伝えられる別の思想とをもつのですか。

「諸君の魂は、思考する靈である。諸君等はこれまでに、同じ問題についても、多くの思想が、時としては丸反対の思想が同時に起こることも知っておろう。その場合、

そのあるものは諸君自身のものだし、あるものは吾々靈のものである。これが諸君等をためらわせる、諸君等はこのように心中に互いに相対立する二つの観念をもつものであるから」

〔四六一〕 どうしたら自分の思想と、外部から受け取った思想を見分けられますか。

「外部から思想が来る時は、ささやきかける、声のような具合にである。自分の思想の場合は、先ず心内に湧き起るものである。実は、この区別は諸君等に、実際上は重要ではない。区別できないことの方が諸君のために良いことが多い。これにより、人間の行動は大いに自由になるわけだ。もし正しい道を選べば、いつそう自発性を発揮することになり、誤った道を選べば、はつきり自分の誤りの責任となるから」

〔四六二〕 知的な人や天才は、常に自分の心中から、その観念を引き出しているのですか。

「その観念は本人の靈から湧くこともあるが、他の靈から来ることもしばしばある。その場合、靈の方は、その観念を本人が理解できること、それを伝えるに値いする

ことをちゃんと判断して伝える。求める着想が自分の中に無ければ、彼等は無意識でインスピレーションを求める。即ち自分では気付かず、一種の口寄せを求める」

〔四六三〕 思想は最初の発想が最も善い、と言われますが、本当ですか。

「当人の霊の性質いかんで、善でもあり、悪のこともある。大事なことは、良いインスピレーションに常に耳を傾けることである」

〔四六四〕 ささやかれた思想が善霊から来たのか、邪霊から来たのか、これを確かめる方法がありますか。

「その性質で見きわめなさい。善霊は常に良い助言を与えるもの、この善か悪かを見きわめるのは貴方である」

〔四六五〕 未熟霊はどんな目的で、私共を悪に誘うのですか。

「自分等と同じ災いに諸君等をおとしめようとしてである」

——それによって、彼等の苦しみが減るのですか。

「いや。彼等は自分達より幸福な者への嫉妬心からそうするのである」

——彼等はどうな災いを私共に与えようと思うのですか。

「下劣な者達、神からずつと隔った者達がもたらす、そういう災いである」

〔四六六〕 神はなぜ、靈達が私共に悪へ誘うのを許し給うのですか。

「人の信と善への節操を試みる手段として、未熟靈が使われる。諸君、靈である者達は、無限なるものへの知を深めねばならない。善に至るためには、諸君は悪の試練を通らねばならない、この目的のためである。吾等の使命は諸君等を正道に導くことにある。もし諸君が悪の影響に踊らされるなら、それは諸君等が自らの意志によつて邪悪靈を呼び寄せたのである。何となれば、邪悪靈どもは諸君等の望むところに、悪の手助けをしようとする。常に待ちかまえているのであるから。諸君の方で悪の道を希望するときのみ、彼等は諸君のために悪の手助けが出来るのである。もし貴方が殺人したい気持をもてば、貴方の周りには、この希望を実現させてやりたいと、待ちかまえている靈魂がひしめいているのである。同じく、貴方の周りには、貴方を善へと誘おうとしている諸靈も取り巻いている。これでバランスがとれるのである、決断は貴方に委されている」

〔四六七〕 私共は、悪に誘おうとする霊達の影響を受けないように出来ますか。

「出来る。彼等が近付く人間というのは、本人の思想や欲求の中に、彼等を引き付ける悪い性質があるからである」

〔四六八〕 私達が反撥すれば、彼等は誘惑が出来ないので、あきらめますか。

「その外に何が出来るか。目的が達成できないと見てとれば、彼等はあきらめる。しかし、彼等は虎視たんたとチャンスを狙っている。猫が鼠を狙う具合に」

〔四六九〕 邪霊の影響を骨抜きにする方法は何ですか。

「正しいことを為すこと、全き信を神に置くこと。これによって邪霊の影響ははねつけられ、その力が諸君に及ぶことはない。悪い思想をそそのかすもの、不調和な気持を起こさせるもの、邪悪な感情を刺戟するもの、かような霊のささやきに一切耳傾けぬ注意が肝心。特に諸君に媚びへつらう者を信用してはいけない。と申すのは、このへつらいによって、彼等は諸君の弱点を突いてくるのである。イエスが主の祈りで、諸君等に言わせている理由はこれである（私共が誘惑に負けぬよう、私共を

誘惑から救い出し給え」と

〔四七〇〕 私共を悪に誘い、私共の心を試そうとする霊達は、そういう使命を受けているのですか。またもしそうならば、彼等にはその責任があるということですか。

「悪へ誘う使命を受けている霊などは存在しない。彼等がそうするのは自分の意志でそうするのであり、従って、その悪業の結果は自分に返って来る。神は彼等の悪の業を許し給う。しかし神がそれを命じられたわけではない、これをはねつけるのは諸君である」

〔四七一〕 私共はこれという原因もなしに、理由のない不安感、動揺、または内心の満足感を感じることがあります。あれは身体の状態からそうなるのですか。

「その多くは、諸君の周りにいる靈魂との、無意識の交流によって起こるのである。また、睡眠中にその交流がなされることもある」

〔四七二〕 霊が私共を悪へ誘うのは、私共のもっている状況をうまく利用してそうするのですか。それとも、霊が自分で都合のよい状況を作り出してそうするのですか。

「それは都合のよいチャンスを見付けてそうするのだが、彼等じしんで作り出すこともよくある。つまり本人が気付かなくても、本人の欲望に沿ってささやきかける方法で。たとえば、路傍で一束の紙幣を拾うとする、この金は霊がそこへ置いたと思っではいけない。しかし、霊はそこを通るように本人にささやきかけるかもしれないのだ。本人がこの金を見付ける、すると霊はこれを着服するように本人にささやく。他方、落し主に返せという声も聞こえる。試練はすべてこのように行われる」

憑依

〔四七三〕 霊は生者の肉体を一時的にまとうことが出来ますか。つまり、生者の肉体に入って、本人の霊に代って活動できますか。

「霊は諸君が家の中に入るように、肉体に入るわけではない。霊は自分と同様な長所短所をもつ本人の霊に自分を同調させ、両者が連合して活動できるようにするわけである。しかし、肉体を使って思うように行動するのは本人の霊の方であって、肉

体所有者の本人の靈にとつて代るような靈は一つもない。靈と肉体とは、摂理により寿命が終わるその時まで、しっかりと結合されているのである」

〔四七四〕 一般概念でいう「憑依」——一つの肉体に二つの靈が住みつくこと——はな
いとしても、次のようなことはあり得ますか。即ち、他の靈がとりついたために本
人の靈の意志が麻痺して、その支配を受けるということですか。

「それはある。諸君が憑依と呼ぶのはこの場合である。しかしながら、この支配は本
人の弱さ^(註)または自由意志が原因で起こるものであつて、これ以外では決して、起
こらぬことを知つて貰いたい。人々はよくこの憑依と、てんかんや狂気をとり違え
る。後者の場合は除靈よりも医師の助力が必要である」

^(註) 本人の意志が強く反抗しても、憑依靈の支配下に入れられてしまう「弱さ」
とは、本人の悪行に対する懲罰と償いの結果である（その悪行とは、現在の
地上生活の場合も、前生の場合も、どちらの場合もある）

〔注解〕 「憑依」という語は、常識では、悪魔が存在するということ、また、一つの
肉体に本人と悪魔の二つの魂が共存するということ、このことを予想させる。しか

し、悪魔という言葉に該当するものは存在しないし、二つの霊が一つの身体に共に住みつくということもあり得ない。だから「憑依」という言葉で常識的に言われているような事は存在しないのである。「憑依される」というのは、本人の霊が、未発達の霊に従属させられて、言いなりになっている状態をさして言う言葉である。

〔四七五〕 人は自力で憑依している邪霊を追い払い、その支配から自由になることが出来る来ますか。

「固くそのつもりになるなら、くひき 軛を振り切ることは可能である」

〔四七六〕 邪霊はとりつき方がうまいので、本人はとりつかれていることに気付かないのではありませんか。こんな場合、第三者がその縁を切つてやる事が出来ますか。このときの縁を切る方法とは何ですか。

「高潔な人間の意志力が、善霊の協力を引き寄せ、この救いの仕事に有効である。人が高潔であればある程、邪霊を追い払い、善霊を引き寄せる力は強い。しかしながら、この場合も、憑依されている本人の方で努力しなければ、どんなに力のある人

でも力は働かない。何となれば、低級な欲求に仕え、他力に依存してはとうしようもないからである。心に不純なものがある人は、どんな場合も、少しも救いの力を働かせることは出来ない。何となれば、善霊はこれを軽んじ、悪霊はこれを少しも怖れないからである」

〔四七七〕 お祓いの文句は邪霊祓いに効果がありますか。

「少しもない。一生懸命お祓いをやつてる者を見て、邪霊どもはこれをあざ笑いながら、憑依をつづける」

〔四七八〕 善意の人が憑依されることがありますが、憑依霊からのがれる一番いい方法とは何でしょうか。

「辛抱しきれなくさせること。ささやきに耳をかさぬこと。無駄だということを思い知らすこと。何も出来ないことが分かれば、彼等は退散する」

〔四七九〕 祈りは、憑依を解くのに有効ですか。

「祈りは助力を得るに有効な方法である。しかし祈りの言葉などは何の効果もない。

神は自らを助ける者を助ける。そして、力の出し惜しみをする者を助けない。それ故、憑依された者は、邪霊を引き寄せている欠点を取り除こうと、最大の努力をすることが必要である」

〔四八〇〕 聖書に、悪魔を追い払ったとありますが、あれはどう考えたらよろしいですか。「悪魔という言葉のとりようで、いろいろになる。この言葉を、人間を支配している邪霊という意味でとるなら、その邪霊の影響をなくした時、明らかに悪魔は除去されたことになる。もし病気の原因を悪魔とみるなら、病気が癒された時、悪魔は払われたことになる。言葉に含まれている意味によって、記述は真実にもなり偽りにもなる。表面に現れていることだけでものを見たり、たとえ話を事実と受け取ったりすると、一番大事な真理が荒唐無けいとなる。この原理を心にとめておきなさい。これは普遍的な何にでも適用できる原理である」

けいれん

〔四八二〕「けいれん」と言われる現象がありますが、あれにも霊が関係していますか。

「大いに関係がある。いわゆる磁気も作動因だが、霊も重要な因をなしている」

——この種の現象に關係している霊は、どの程度の霊ですか。

「ややましな霊達である。高級霊がこんなことに時間を労費すると思いませんか」

〔四八三〕一団の人々が突如けいれんというか、異常な興奮状態に投げこまれますが、あれはどういうことですか。

「あれは共感による。精神性向は時に極めて伝染性を示す。諸君には人間磁気の影響が判らぬこともないと思うが、この場合、霊魂も人々と交感しつつ、現象生起に一役かっているのである」

〔注解〕「けいれん」には不思議な特性が色々あるが、夢遊病や催眠術が示す例と一致するものが数々ある。無痛覚、読心、思想伝達、異常興奮等々。それ故、この原因は、無意識の相互作用で生起する、いわば覚醒時の夢遊病、これであろう。彼等

は自分では無意識ながら、催眠術者であり同時に被催眠者である。

〔四八三〕 けいれんの場合、時には無痛覚、他の者の場合は極度の苦痛が起りますが、この原因は何ですか。

「あるものは、単に神経に人間磁気が作用して生起するのである。他の場合は、精神が興奮した結果、肉体感覚が失われるのである。つまり、霊に生命が集中され身体から後退する、そのようなことである。諸君も経験があるのでないか、霊が何かに没頭すると、身体は何も感覺せず、見ず、聞かずということを」

霊が人に及ぼす影響

〔四八四〕 霊は人をより好みますか。

「善霊は、善良な人、自己を改善する人、すべてと交感する。低級霊は悪人、悪になじむ者と交感する。どちらの場合も、その接触は気持が同じであることによる」

〔四八五〕 ある人に対するある霊の情愛というものは、もっぱら心情だけのものですか。

「本当の情愛には、肉感的なものは少しもない。しかし、霊が生者に接触する時は、必ずしも情愛だけではない。というのは、人間的な情の追憶があるかもしれないからである」

〔四八六〕 霊は私共の不幸や成功に関心をもちますか。私共の幸福を願っている彼等は、私共が病気になると思ひますか。

「善霊は、自分に出来る良い事を諸君らにしてやりたいと思つてゐるし、諸君らが自分の不幸に耐えきれず投げ出せば、そのことを悲しむ。何となれば、この場合は、その不幸から何の成果も得られないから、つまり病気を治す良薬をはねつける病人のようなものだから」

〔四八七〕 霊友達を最も悲しませる病気とは何ですか。身体の病気、それとも道德的な欠陥ですか。

「彼等が最も悲しむのは、諸君等の利己心と無慈悲な心。これが一切の諸君等の苦悩の原因となるからである」

〔四八八〕 故人となつてゐる身内や友人達は、全く他人の霊達よりも私共に共感をもつてゐるのでしょうか。

「それは間違いなくそうである。彼等は自分の力相応に、諸君等を霊として守つてゐる」

——彼等は私共が抱いてゐる彼等への情愛を感じていますか。

「全くそのとおり、しかしながら、彼等を忘れる者達は彼等も忘れる」

守護霊・守護天使

〔四八九〕 守護や救助の目的で、特定の個人に接触する霊魂がいますか。

「いる。霊的兄弟である。即ち諸君等の言う守護霊である」

〔四九〇〕 「守護天使」という言葉に当たるものは何でしょうか。

「高次元の守護霊のことである」

〔四九一〕 守護霊の使命は何ですか。

「子供に対する父の使命——守護される者を正道に導き、助言を与えて助けてやり、苦しむその者を慰め、地上の試練に耐える勇気を奮い起こさせる役目である」

〔四九二〕 守護霊は誕生の時から本人についているのですか。

「その誕生の時から、死の時までである。なおしばしば、死後も、霊界に入っても本人に付き添うこともあり、その後の数次の地上再生にも付き添うことさえある。と申しても、この数回の再生にしても、本人の霊的生命からすればほんのささやかな部分にすぎないのだから」

〔四九三〕 守護霊の使命は、自発的なものですか、義務ですか。

「貴方の守護霊は、貴方を守るよう義務づけられている。というのは、守護霊本人がこの仕事を受け入れたのだから。しかし、霊が誰を守護するかは、自己に共感をもつ人々の中から選ぶことを許されている。ある場合には、この仕事は喜びであり、またある場合には、それは使命ないし義務である」

——一人に付き添うことになる、その霊は、他の者達への保護は差し控えるよ

う、義務づけられるのですか。

「いや、しかしながら、本人はひたすらそのように手控えをする」

〔四九四〕 守護霊は、その守護する人間に絶えず付き添っているのですか。

「霊は種々の使命遂行のため、その席をあけることがよくある。だがこの場合は、見張り役を交替して貰うことになる」

〔四九五〕 守護される本人が指導にどうしても従わぬ時は、守護霊がその守護を放棄するということですが、よくありますか。

「助言の効果がないと見てとった時、また低級霊の言うなりになってどう仕様もない時、守護霊は手をひく。しかし、本人を全く見捨てるわけではなく、言うことを聞くよう努力を続ける。本人を捨てるのは守護霊ではなく、守護霊の言葉に耳を閉ざす人間の方である。人間の方で守護霊に心を向ければ、守護霊は直ぐ戻って来る」

「最大の不信の徒の心をもとらえて放さぬ教理がもしあるとすれば、この守護霊の存在、即ち守護天使の存在の教理であろう。貴方の傍にはいつも、貴方より優れた者

がいる、その人は貴方に常に寄り添い助言を与え、進歩の坂道を登るのを支え助けてくれている。此の世のどんなつながりよりも深い縁で結ばれ、その情愛は真実、貴方のために尽してくれる、その人が貴方の傍に居る。こう考える時——これ以上の心の慰めがありますかな？このような存在が、神の命によつて貴方の傍に居る、この者を貴方の傍に置かれたのは神である。彼等は神の愛によつてそこに在る、彼等は高貴にして労多い使命を諸君等のために果たしてくれている。諸君等が行く処に彼等はある、地下の牢獄、人里はなれた処、らい病患者の家、どんな墮落漢の巢窟にも彼等は居る。何者も諸君等を、その見えぬ友から引き離すことをしない。その優しい刺戟はそこにあり、心の奥深くで賢者の誠告は耳に聞こえる」

「この真理を、諸君等が心に更に深く刻まれんことを。必要の折には、この真理が幾度でも、諸君等を助けるであろう。悪霊どもの落とし穴より、諸君等を救い出すであろう。しかしながら、最後の審判の日に、守護の天使は繰返し諸君等に言わねばならぬ。私はきつくお前にすすめただろう、しかしお前は耳をかそうとしなかった。私は地獄を見せなかつたか、しかるにお前はいつでも其処に身を投げ入れようとし

た。私は真理の声を耳に聞かせようとしなかったか？ それでもお前は目の前の助言に従いはしなかった、と。

諸君の守護天使の言葉に耳を傾けよ、自分と天使等の間に信頼と愛の友ならでは、情愛のきずなを築きなされ。何もかも天使の目から隠すな、彼等は神の目である。諸君は何一つ彼等を欺くことは出来ない。未来に目を向けよ、進歩向上の道を進みなされ。このとき試練の日は短くなり、さいわいは更に増す。

人よ勇氣をもて。すべての偏見と心の枠を取り払え。断固として、眼前に開かれている新しい道に踏み入れ。諸君等は守護靈をもつ、それに従いなされ。諸君等の終着点に狂いはない、そのゴールは神ご自身であるから――

「高級靈が煩瑣はんさきわまりない辛抱のいる仕事に縛り付けられているなんて不可能なことだ。こう考えている人々に、次のように申したい。吾々は何千万キロ離れていても、諸君等の魂に交感できると。空間など吾々にとつては何ものでもない。他界に在っても、吾々靈は諸君等とつながりを保っている。吾等は諸君の想像の及ばない特質をもつ。神は吾等に力を越える責務を与え給わず。また神は地に在る諸君等を、

友もなく支持者もなしに捨て置き給わなかつたと、かように確信されよ。一人の守護の天使が一人の守護される者を持つ。父が子供を見守るようにその者を守護する。その子が正道を歩めば、これを喜び、その助言に耳を傾けぬ時は、これを嘆く。「諸君等の質問で吾等を煩わすことを恐れるな。逆に、常に吾等と接触を保つておられよ。これにより諸君等はいよいよ強靱に、いよいよ幸福になろう。この、人と守護霊とを結ぶ交感によつて、人はついに霊との媒介者となり、世界から不信を追放する者となる。教えを受け取つた諸君等は、今度は教える者となれ、才能ある者は、同胞らを進歩させる者となれ。これにより人はどんなに大きな仕事をする者となるか、お分かりかな。これぞキリストの仕事、神によつて諸君等に課されている仕事。何故に、神は諸君に知恵と知識を与え給うたか、もし諸君等がこれを同胞等と共に分かち合わないとしたら。これぞ、永遠の至福へと導く大道を人々が進むことを助けんがために」

〔四九六〕 もし霊がその守護すべき者を見捨てて、もはや導かなければ、いやしくも守護霊がこの者に害を与えようとするのですか。

「善霊はなに人も損なうことをしない。彼等とはとって代る霊どものがままた委せるのである。その時、人は損なった自分の不幸の運命を責めたてる。実際には、そうになったのは自分の悪行の結果であるのに」

〔四九七〕 守護霊が、守護している者に害を及ぼす霊のなすがままに、委せておくなどということがあるのですか。

「邪霊達は、善霊の行為を骨ぬきにしようとして集る。しかし、人間の方の気持が守護霊にピタリと向かえば問題ないわけである。そこで守護霊の方は、その間、他の善意の助けてやれそうな人間に目をつける。つまり、本人の気持が守護霊に戻って来る間、守護霊は別の善を為す機会を利用しているというわけである」

〔四九八〕 守護霊がその守護すべき者を、迷いの道に放り出したままにしておくのは、彼が本人を迷わせる悪霊をうまく処理できないからですか。

「それは処理できないからではない。彼がそうすることを望んでいないのである。と言うのは、振りかかる試練を通じて、本人がいつそう賢くまた良くなることを知っ

ているからである。守護霊の方は本人の心に向かつて、賢明な助言を与えている。しかし不幸なことに一向に本人の注意をひかないのである。悪霊に力を与えるものは、人間の弱さ、不注意、高慢さである。即ち、悪霊が人間を屈服する力は、人間が悪霊に対して十分に抵抗しないこと、そこから出てくるのである」

〔四九九〕 守護霊はいつも本人と共に居るのですか。本人を放り出している時以外は、本人を目から離すことはないのですか。

「本人には、守護霊が必ずしも傍に居なくてもよい時がある」

〔五〇〇〕 霊にとって、守護天使の存在がもはや必要でない時が来ますか。

「来る。自分ひとり歩いて行けるほどに進歩した時、つまり、生徒が先生を必要としない時が来るように。しかし諸君等の地上生活中には来ない」

〔五〇一〕 私共に働きかける霊の行為は不可解に思える面がありますが、何故ですか。守ってくれるのなら、何故いつも守りつづけてくれないのですか。

「もし諸君が彼等の支持をあてにすれば、自分で動こうとはしないだろう。それでは

諸君の靈性の進歩はない。進歩のために人はおのおの経験を必要とする、しばしば己が犠牲においてである。人間は自力を發揮することが大切、そうでなければ、一人歩きを許されていない子供に等しい。諸君の幸福を願う靈達の行為は、自由意志によつて諸君を歩かせる、これが定まったコースである。もし自己責任がなければ、人は神に至る道を前進することはない。人は、その守護する者の姿を目にすることなく、自力を發揮する。しかし守護靈の方は、当人の姿を見守っており、時を分かたず呼びかけている、危険に気を付けよと」

〔五〇二〕 守護靈は、守護すべき者の指導がうまくいけば、それによつて自ら得るものがあるのですか。

「それはやり甲斐のある仕事である。守護靈本人の進歩と幸福に役立つ。彼は自分の労苦が、成功と勝利の栄冠で報いられているさまを見て歡喜する。丁度、生徒指導で成功をおさめた教師のように」

——成功しなければ、責任をとるのですか。

「いや、左様なことはない。全力を奮つてそれをしてる限り」